

始めるのだ。

As needful in our loves, fitting our duty. (173)

ただ、「東の高い山」を「天」を目指して登る人々は、「丁度いい具合に」(175) 同じ言葉で通じ合えはしない。乱れた言葉は呪いの幻想を何時でも生み得るのである。混じり合う人声の健康な乱雑を愛し、目的をいつも確かにしておくこと、それが「言葉、言葉、言葉」の「芝居」の約束ではないか？ 舞台には「言葉」を操る「身体」の他には一切何も無いのである。

(October 1986)

#### 注

- 1) 拙論「『ハムレット』：悲劇の構造3，狂気とプロット」，福岡女子大学文学部紀要「文芸と思想」第37号，1973.
- 2) 以下テキスト引用は下記による。  
*Shakespeare; Complete Works*, edited with a glossary by W. J. Craig, M. A., Oxford University Press, 1980.

蔵しているからであり、自ら創造への誘いを断念する結果になるからである。

the paragon of animals! And yet, to me, what is this quintessence of  
dust? (2. 2. 327-328)

Get thee to a nunnery: why wouldst thou be a breeder of sinners?  
(3, 1, 124-125)

これは脱出口の無い同語反復である。だが、ハムレットは論の赴く所自分を「根っからの悪人達」(3. 1. 134)の一人と定義せざるを得ないけれども、実際には裁き手のように振る舞っている。すなわち、オフィーリアへの怒りの形で表現されているのは、思想の牢獄に対する苛立なのである。

思い上がった思想が人間を呪うのに反して、途方に暮れた者達が交わす心は、思想によって不毛化されながら、美しく思想を弁護している。

*Ham.* To a nunnery, go; and quickly too. Farewell.

*Oph.* O heavenly powers, restore him! (148-149)

互いにあらぬ方に向いて、来るとも信じられない救いを待っている。しかし、言葉によってどのように隔てられても、孤独であっても絶望していても、人は人への思いを離れることはない。だから、人が人に対して心そのままに現れることができないならば、人が神の約束を果たし得るかどうかは、自分達がそれを果たそうと努め続けて来たと思えるかどうか、「祈り」によって「記憶」を読解できるかどうかで決まるのである。

救い手としての自分の役を決めた時、オフィーリアは、彼女が上手くやりさえすればよい問題として、事態を掌握していた。彼女が失敗するのは、一見、王子もまたあの「記憶」の「庭」から放逐されているからのように見えるけれども、本当は、彼が「庭」を作る未完の仕事を放棄して、幻想の天上庭園から見下ろして呪うからである。しかし、これは矛盾した二役なのである。呪う神と呪われる人を同時に演じているのだ。この幻想を負って、「学者」ハムレットは絶望の証人であることを余儀無くされる。

しかし、自然の時間の中では、絶望は希望の一步なのである。

But, look, the morn in russet mantle clad,  
Walks o'er the dew of yon high eastern hill. (1. 1. 166-167)

朝は「東」の険しい山の涙を越えて仕事着で来る。闇に怯えた者達が、「救い主」についてあれこれと語った後で、愛と義務の一致を信じて、今日の仕事を

いう空しい声に塗り隠された「売春宿」だということである。

ハムレットが怒るのは、オフィーリアの心を読み損なった結果であり、読み損なうのは「女は弱い」と教えられているからである。狂気が循環している。循環の動力は、ここでは女に拒まれるのを恐れる不安だと言える。激しく女の慰めを欲し、それを所有する権利を主張し、従順さの美德を押し付け、「貞節」の画像に女を押し込めながら、それから出ることを要求し、出て来ようとする気配に罪の匂いを臭ぎ付ける、という狂気に陥っている。

The chariest maid is prodigal enough  
If she unmask the beauty to the moon;  
Virtue herself 'scapes not calumnious strokes. (1. 3. 36-38)

オフィーリアがハムレットを救おうとした時、不条理な予言は成就した。

狂気は、「尼寺」に救いがあると見せ掛けて、「人間」を呪いの中に放置するやりかたにある。ハムレットにとって、「尼寺」は美德の身振り、愛の不在を悲しむ心の証人でしかない。その怒りと絶望の身振りが、一人の少女の救いの芽を潰している。それは、亡霊が語る「天」の無慈悲な苦痛の描写が、ハムレットに復讐命令を承諾させて死に追うのと同じ倒錯である。

むしろ「尼寺」に託された祈りは、善良さを表に掲げた「尼寺」ではなく、「売春宿」という状況のなかで理解される。不自由な肉体を求めに応じて提供するの、死に付せられた命をもって生の誘いに応じる存在の偽らぬ姿なのである。個々の死があるから、連帯する身体の意味がある。

For this relief much thanks;'tis bitter cold,  
And I am sick at heart. (1. 1. 8-9)

だから、一見逆説のようでも、「永遠」から意味を奪うのは、死を追い払う企てであり、死後の生の約束である。どちらも肉体の頼り無さを繕いはしないのである。

Cut off even in the blossoms of my sin,  
Unhousel'd, disappointed, unanel'd,  
No reckoning made, but sent to my account  
With all my imperfections on my head. (1. 5. 76-79)

不死の幻想によって肉体は軽蔑され、ただ疎外感に苦しむ。（「亡霊」が疎外そのものの表象であることも最早明かであろう。）

ハムレットの恋が不毛に帰すのは、彼の思想が不死の幻想と肉体蔑視とを内

た欺しをオフィーリアに発見した時、彼は全く気付かなかったが、オフィーリアは「恋の手品」を故意に演じていただけでなく、父に隠れて王子を誘う行為を裏切りとは思わない者になっていた。主観的な動機を離れて形式的に言えば、これは度し難い無恥とハムレットが呼ぶものにほかならないのである。

このような照応は、人物の意識を中心にとすると、偶然の符合、神秘的としか考えようがない符合であるが、勿論、同一の生活原則が行動をも想像力をも律している結果、事実と誤解とが同じ構造を持っていて、見掛け上判断の正しさを印象するのである。「ハムレット」のアクションが人物達の心を表面下に閉ざしたままいとも無慈悲に進行するのは、このためであり、だからそれはいわば幻想に導かれた虚の物語なのである。

こういうわけで、錯覚とそれに基づく対応行動が織り出す事件の裏に、最後の第四の真実が見えて来る。誰もこのような苦痛に満ちた展開、あるいは災厄の袋小路を願ってはいないだけではなく、そこから脱出しようと努力しているのである。「理性」は不幸な虚の物語りに支配されていても、「身体」は決して本来の欲求を偽ることがないのであり、隠れた「心」と呼んで来たものは、売春婦の境遇に落ちた物言えぬ身体の悲しみの表情なのである。

オフィーリアは毒舌を浴びて呆然とするが、王子の不可解な言葉を、自分が原因となった狂気と考えて悲しむ。オフィーリアの心をもしハムレットが知ったならば、それでも彼女の不貞に絶望し続けただろうか？ 愛が、孤りでは無力な者同志の間に交わされる救いの誘いであるとすれば、同情と拒否との違いは大きい。そこで、人々は自分達を救済する自分達の力をどのように信じ得るか、という最後の問題が現れる。

## 7

「尼寺に行け」とハムレットは言う。「罪人を生む者」(3. 5. 135) となるなと説くからには、「尼寺」イコール「売春宿」という冷笑が「尼寺」に浴びせられているのではない。「人間」に絶望した精神を待ち設けているのは、死後の罰の教説と、贖罪の施設である。愛した妻をせめて良心の苛責に委ねる亡霊のように、王子もオフィーリアのために、せめて天上に近い所を選んだのだ。しかし、死一等を減じた「良心」が地獄の苦患以上の展望を持たないように、「罪人を生む者」という観念は性的存在にとって致命的である。命は弱さを悔いる以外の目的を失う。ハムレットは「本来の決意の色」が死後の罰の恐怖で青ざめると言いながら、人の本来の仕事を定義してはいない。人が呪われた存在だと言うことは、「尼寺」は汚濁を装う「白粉」で、世界は「尼寺に行け」と

第一のものについては、ハムレットがオフィーリアを裏切り者扱いする時に、彼女が確かにそう言われてもいのように見えることをすでに述べた。ハムレットの狂気ということも、オフィーリアがそれを言わなくても、結婚を全て否定するというような論理の妥当性の無さが感情の過剰を示している。しかし、その過剰を根拠にしてハムレットの非難の偏りを疑っても、オフィーリアを無実とする積極的な理由は出て来ない。それよりも、裏切り状況と狂気とは互いを合法化し合って、混然と無秩序状態を現出する。ハムレットの情緒的身振りによってこの場が枠付けされるのである。

このような印象主義的な反応の魅力は、その勢いに逆らう慎重さを細部へのこだわりとして無視できるところにあるが、この場合、互いに相手の狂気と不貞を指摘する二つの批評活動が絶対に並び立たないという基本的事実は残っている。もし、オフィーリアの行動がハムレットの非難に価するものであるならば、彼女にはハムレットを狂気と呼ぶ何の理由も無い筈である。彼女は王子の高貴な魂が狂ったと言うのであって、その怒りの理由が判らないのである。ハムレットが彼女に理性を失った絶望的な不貞を見ているのに、オフィーリアは当惑と悲嘆の表情によって認識の自由を留保している。この人間論的な事実は、ハムレットの情緒に支配された印象主義的な理解への無言の抗議をなすものである。（「劇中劇の場」で劇中王妃の「過剰な抗議」を批評する淑やかなガートルードの態度も、ハムレットの抱く母親像への無言の抗議をなしている。）

ハムレットは心底腹を立てているけれども、オフィーリアには全く身に覚えがない。だから、オフィーリアは王子のその態度を精神錯乱の兆候と見るのであるが、その意味でハムレットはいかなる時も狂気であったことはない。

ここに第二のレヴェルの真実が現れている。ハムレットが不貞な行動だと解釈したものは、オフィーリア自身から見れば非難されるいわれの無い行動である。彼女の目からは精神異常にしか見えないものは、彼にとって健全さの孤塁を守る姿勢なのだ。互いに相手の「心」を誤解しているのである。しかし、相手の「姿」にはとんでもない誤解をさせる充分な理由もある筈である。こうして新しい展望が開く。オフィーリアは何を意図したのか？ ハムレットは何を見たのか？ その行き違いの理由は何か？　すでにこれらの問いに私なりの答えを試みて来た。

動機の世界に触れて、理解を行き違わせている精密な技法に気が付くと、単に誤解というだけでは済まない第三の真実が見えて来る。部屋を訪れた王子の姿にオフィーリアが「狂気」を見た時、彼女は全く気付かなかったけれども、王子は「恋の狂気」を故意に演じていたのであり、それだけでなく、求愛と別れとを同時に行うという狂気を正気と信じていた。また、ハムレットが隠され

平気な顔で王妃を演じている母のように。それにしても神聖な祈りの本によって汚れた欲望を装うとは！ この女は誰かに恋の口説と一緒に貰った贈り物を間違えて王子に返ししながら、自分の汚い本当の姿を知られたことに気が付かないでいる。

ハムレットの神聖な「誓い」がオフィーリアの胸に呼び起こした感動は、醜悪な不倫の情欲の浅ましい「印し」となった。こうして「祈りの書」はめぐりめぐって「砂糖を振り掛けた悪魔」の「操り人形」(3. 2. 261)に変化する。貞節像は逆転した。同時に、「美しいオフィーリア」に誘われた彼自身の愛は、劣情に引き寄せられた劣情となった。

だが事實は、ハムレットは自分の影を呪っているに過ぎない。呪うべき事實は外的に存在しない。ただ、第一節の最後でオフィーリアについて述べたように、愛が愛する者の手を離れてしまうのである。ハムレット自身が主人公であれば神聖なものと信じられた求愛の舞台が、他人が主人公となった途端に醜悪な情欲の場となるという、ハムレットの感受性内部の動きに注意しなくてはならない。今、彼は、母の帰属を巡って天上の父の神聖な所有権と地上の叔父の汚れた誘惑力を対立させた第一独白を再演したのである。彼自身の誠実な求愛が神聖であったり醜悪であったりするのは、この二分法的な区別が幻想であることを物語る。このことは、「陽の神」と「半獣」とが「兄弟」であるという事実の中に最初から明かなのであった。聖性とは、嫉妬心の装いなのであった。「別れ」を告げておきながら、ハムレットは自分がオフィーリアの只一人の聖なる求愛者であると信じている。「愛」を掲げながら「死」への道連れにする結果になるのは、欲望が、愛すべき者への関心を同じくする人々との協力に向かわずに、闘争に向かうからである。

## 6

このようにして、真実是不思議な手並みで己を露わすのであるが、現れて来る真実を四つの水準に分けて考えることができそうに思われる。一つは、人物の言葉に誘われて状況全体が見せる姿である。二つは、人物が他の人物の行動を、行為者の意図とは全く違う意味に解釈していて、だれもそのことに気付かないという状況である。三つ目は、ある対象についての人物の言葉が、彼が言った意味では間違っているけれども、全く彼が覚っていない意味で、その対象にあてはまるという状況である。最後は、表現の行き違いにもかかわらず、あらゆる人間行動は只一つの動機——愛の呼び掛け（広義の求愛）——によって促されているという発見である。

よ、祈る者は罪人と定義された人間の罪を「覚えて」いてくれるけれども、罪の所在を自覚させるに過ぎない。すなわち、一方でマリアの祈りは無効であると暗黙に了解してそのイメージだけを演じているのであるが、同時に、許されない罪と定義された愛の欲望が「美しい」「ニンフ」の魅力と結びついているのである。オフィーリアが差し出す祈禱書の意味をハムレットが彼女の期待通りに理解するかどうかという問題は、愛を罪と定義することに由来する「祈り」の形骸化の問題に接している。（これは「祈りの場」で鋭く抉り出される。）

さて、オフィーリアは、「祈りの書」のトリックが何故必要であるかをハムレットに教えることなしに、愛の寓意を理解させようと試み、その寓意の具体的内容である王子の求愛の感動を再現して寓意を補強しようとした。そして、乱れた服がハムレットの本来の姿ではないことが「恋人」の寓意を解読する鍵であったように、祈りの本が王子からの贈り物ではないという事実が「祈り」の寓意解読の鍵であった。

だが、ハムレットの悲痛な沈黙がオフィーリアを驚かせたように、彼女の言葉の情熱が王子を驚かせる。“To be, or not to be” 独白でハムレットは、彼の欠失感に応えようとしない世界への絶望を表白し、いずれにせよ絶望的な戦いである人生の後に同じく絶望的な死後が待っている絶望を訴える。「軽んじられた愛の苦痛」が冷たい絶対の現実なのであって、それを「貞節」と呼んでも、「魂の偶像」は雪や氷のように冷たいのである。だから、オフィーリアの突然の情熱の表現は「貞節」に結びつき得ないだけでなく、別れを伴う彼の求愛法に属し得なかった。オフィーリアが彼から貰ったと主張する品物は、彼が与えたものではないという性質で判断される他なかったのである。それは彼以外の男からの贈り物なのだ。ハムレットは、彼自身の求愛の記録を、他人の求愛の記録として聞いたのである。

求愛の受け手である女性に対して一方的に誓いの主導権を取る恋人であるハムレットにとって、崇拜する偶像からの贈り物という観念は余りに遠かった。そして、解釈の手掛かりは余りに近くにあった。

With witchcraft of his wit, with traitrous gifts,—

O wicked wit and gifts, that have the power

So to seduce!

(1, 5, 43–45)

「弱い者、その名は女だ」。これが「心の偶像」と信じていた女からの彼の高貴な「別れ」への返事なのだ。それは「愛情の欠如」を非難する高貴な貴婦人の姿を演じているが、結局、家を出て戦いに赴く夫に貞節を尽くすことができない醜悪な心の装いなのだ。丁度、父が居なくなると早速叔父に乗り換えて

の連帯であるという合意の形式を用いたのであるが、オフィーリアの中では、「私的な」求愛の「天上」性はすでに同じく密かに至高性を主張する他の種類の連帯、家族共同体の権威、によって攪乱されている。彼女は父への従順の義務によって攪乱に耐えながら、父権の命令に従い、天上的な求愛を「思い出」として保存している。全く同じことがハムレットに起こっていて、彼の天上性は臣下達の生死を賭けた処世術を無視して維持される。そして、父への従順の義務によって拘束されている。

ただ彼にあっては、亡霊が、王の名を自分に残して政治を他人に託すリアのように、彼に父権の代行を命じるので、権力の持つ私的所有権以外の性質は、王子の視界から隠れてしまう。それは、第一独白で彼を捉えている「太陽神」像の構造を語る出来事の一つなのである。王権と結んでいた父権の絶対性はハムレット王の肉体性を許容しないので、死をも許容しない。つまり、それほどに肉体性と固着している。だから父の死の結果王権がその兄弟の手に渡ると、父の永遠の天上性が叔父の肉体の絶対権と衝突する観を呈する。王権の絶対的支配力を天上性と信じる限り、天上性を胎内から作り出しつつある身体的世界が消滅する。死に付されながら、それが単に身体の死であると知ることを禁じられるのだ。だからハムレットは「亡霊」なのであって、一方で死の苦痛に直面しながら、他方では世界の創造における個体の消滅の承認が苦痛からの解放であることを承認できないで、求愛の世界に生命の「形」を求めて、「弱い者」にぶつかるのである。

オフィーリアが差し出す祈りの本は、弱い者から弱いものに差し伸べられた手を意味しており、「生命」の自発的な自己救済の働きの寓意としての「祈り」を意味している。ところが王子は、求愛の「私的な」世界に別れを告げたばかりなのであって、今や生命を信じられない世界にいた。“To be, or not to be” 独白の世界のハムレットは、彼を待ち受けるオフィーリアの祈りを解読できない。

The fair Ophelia! Nymph, in thy orisons

Be all my sins remember'd.

(3. 1. 89-90)

ここで「ニンフ」という語法は、第一独白の「天」と「地」の二分法から独立しているように見えながら、それに属しており、「ニンフ」と呼ばれる者がどちらに帰属するかは極めて微妙である。一方で、これは神の怒りに対して罪人の申し開きをする仲保者マリアの姿に似ており、祈ってくれる者への祈りという形式がハムレットによって習慣的に用いられている。しかし、彼はここで祈ってはいない。実際祈り手としてのオフィーリアは愛に応えない「貞節」像と一体である。救いは祈りからは来ないのだ。マリアにせよオフィーリアにせ



裏側の「身体」の真相である。別れのまなざしによって魂の結婚を遡って成就するはかなかったのだ。

## 5

ハムレットの表現が通じないのは、行動の背後の状況を隠すからである。すなわち、最も支配的な、変更不可能な作用力について問わずに、目前の変更可能な、すなわち「言葉」の力が働きそうな関係に働きかけている。変更不可能な支配力を「義務感」と置き換え、変更を目指す誘いを「愛」と呼ぶのはあながち牽強付会ではないだろう。愛の誘いが常に義務によって妨げられる構造は、「ハムレット」世界をもハムレット王子をも概括的に良く説明してくれる。しかし、人物が義務と愛とに引き裂かれる体験をしているとしても、細部を点検すると、「義務」と「愛」という実体同志の苛烈な衝突など存在しない。あるのは「愛」が己の名によって己を抑圧している状況なのである。すなわち、義務は愛の献身の表現であって、それ無しには愛が成り立たないけれども、形に囚われると目的を失う。義務はいつも愛によって批評されなくてはならない。「ハムレット」の悲劇は、義務の「誓い」が愛の「祈り」を踏み越える状況として説明できる。

義務が秘密を要求するという事実は、秩序の個々の要素が死を恐れる深く無条件の感情の動きであるのを物語る。ところで、死からの完璧な安全は有り得ないのである。死は暫く見えなくできるけれども、驚愕を伴って貸しを取り立てに来る。しかし、これも芝居好みの言い方であって、人はいつも無常を乗り越えようとする姿で、無常に触れているのである。協力だけが永遠を夢見るのを可能にするのであるが、それを個の権利と錯覚すれば、人は自分が立てた過大な約束に耐えないことになる。

愛と義務が闇の中で衝突する状況では、「形」の合意が揺れるので、乱れた服装という周知の筈の寓意が「言葉」を失う。すなわち、この宮廷風の所作が有効であるのは、衝突に直接晒されないで衝突の妨害効果を楽しみ得る範囲である。服装への無頓着は愛の真の飢餓状態の寓意であることになっているが、真の飢餓はまさしく折り重なる寓意の網を越えてしか現れない。最後に残る「言葉」は「悲しみの訴え」であり、「妨げられた愛」の「錯乱」の表情である。

故意に何かを隠さなくても、合意されたと信じられている寓意形式そのものに欠陥がある。それは欲望の正直な表現が禁じられているために、欲望を欲望でないかのように見せ掛けて満たして来た歴史の記録なのである。たまたま共にする欲望だけについて狭い連帯が成り立っているだけなのだ。ハムレットは狭い連帯を求めなくてはならない状況に追い込まれて、狭い連帯が唯一至高

ところで、これは命令者である父の亡霊の本質であって、身体を失った後に残る部分でありながら、準備も無く慌てて、なお生前信じていた通り生前の「形」の説得力を信じている。実際には亡霊の「形」は社会関係を既に外れているため説得力を持たない。すなわち、帝王の栄光は彼の支配力に託された無数の命の希望の輝きであって、彼の実体ではない。実体と錯覚された栄光は、王個人の实体にとっては「死」にはかならない。この意味の「死」は亡霊が「死者」であることと同じではない。亡霊はハムレットによって父と認められて言葉を得る。死者は、人々との絆を失った時死ぬのである。しかし、ハムレット王は本当のきづなで兵士達とは結ばれていなかったし、今もそれに気が付いてはいない。彼の栄光は、彼の滅ぶべき体を隠していたに過ぎない。私有された栄光は、それに命を託す人々の犠牲の総量であるが、王は彼を支える他者達の努力と苦痛を洞察できない。この無名の人々の相互の努力が死に効果的に逆らう力であり、愛とか連帯とかと呼ばれる運動の心である。心を隔てる帝王の装いを信じている限り、死の悲しみの只中にあっても亡霊の求愛は、

Adieu, adieu! remember me.

(111)

で終わる。そして、ハムレットの求愛もその運命を辿るのである。

父の復讐命令を受諾して他の全てを捨てると誓った彼には、別れだけが恋人として残された儀式なのである。死別だけが、ハムレットに許される行く先なのだ。彼が恋人の部屋を訪ねることができたのは、「つれない婦人」に別れを告げて「王」のために戦いに出る「恋人」だったからなのであり、それが形の「鑄型」ハムレットの美意識を満足させる高貴な定型だったからである。

ハムレットは父の亡霊の別れの言葉を「私の言葉」(110)として記憶したが、今それを心を込めて演じている。彼はこの崇高な行動の型に自分を一体化させる。もっとも、他に選択の余地はないのだ。なぜなら、「別れ」の儀式的姿で現れているのは、父王の権利意識を尊重する息子の義務だからである。復讐心は相続された。しかし、オフィーリアに別れを自ら告げるとは、ガートルードに裏切られることとは違う。亡霊が妻に裏切られたと錯覚したために、ハムレットがオフィーリアと別れるとすれば、一つの迷妄が引き継がれたのに間違いは無いけれども、人が私的な復讐心を抱くに至る場合でも、自分を無にする献身という入り口から入るのである。

みずから「別離」の証人となって、王子は、力が支配する世界で愛が空しく「死」に付された歴史の縮図となる。「言葉」を「沈黙」に変えた時、彼は王の「美しい勇武の姿」(1. 1. 47)の背後で滅びる「兵士」の身体 of 役を買っていた。それが「王子」の、それゆえ「王」の、「気高い」「型」「鑑」「鑄型」の

って、拒否の必要の裏に隠れていた同情と反省が働く。自分の短慮を悔いるのである。

王子についての判断が間違っているのは言うまでもない。しかし、助けよう、親切にしようという動機があれば、これ以上誤解から苦痛を産み出すことは無い筈なのだ。これ以後ポロウニアスは、ハムレットを敵視しないので、彼の放つ言葉に刺されない。（反対に、ハムレットは、彼を愚弄した挙げ句間違えて殺し、神の意志だと言うのである。）だが、支配的な妄想は続いている。ハムレットのことを大臣が大いに心配するのは、傷ついたのが王子だからであって、娘は従順な財産以上のものではない。この大臣は人間の欲望を見抜いて巧みに処理する知恵者であるが、その知恵も王権体制の秩序を維持する義務に従属し、王の怒りを買わない用心という習性によって束縛されている。

ハムレットは、「求愛する者」の資格によって恋愛の黙約通りオフィーリアの傍に誓く止まることを無言で許されたつもりでいた。しかし彼女はそれ以上何の反応も見せなかった。彼女は「美德」に鎧われた「つれない美女」だった。あくまで求愛の次元で「懇願者」は冷たい「美德」の前に引き下がる。

しかしハムレットは、宮廷をだますために故意に演じた「狂気」によって、「狂った恋人」像の説得力を無にしている。狂気と狂気が衝突して互いに本来的な意味を持たないことが判然として来る。これら「狂気の装い」の効用を正気で信じるのが「狂気」の実体であり、心の交わりを阻むものであることが証明されている。オフィーリアが「亡霊」と感じたものは、実は「狂気」を受諾するという「狂気」である。実際、宮廷を潜在的な敵とみなしていれば、オフィーリアへの愛を成就する可能性はあり得ない。（ロミオとジュリエットの運命はほんの一例である。）そのことは、更に具体的に、復讐のため他の喜びを捨てるという誓いで表わされた。（ジュリエットへの愛で自分が卑怯者になってと考えて、復讐の名誉を採るロミオの行動はほんの一例である。）ハムレットの「無言」は「言葉を失った恋人」の擬態であるが、「無言」を含む恋の擬態が必要となったのは、復讐の秘密の義務を隠す鎧としての狂気の装いの企みが知れてはならなかったからである。「尼寺の場」のオフィーリアの「言葉」が恋の擬態である前に、貞節の「義務」を守る鎧であるのと同じである。

だが、違いがある。オフィーリアはそれを着たまま、相手の傷に驚いて手を差し伸べ、父の始めた戦いを悔いる。ハムレットはそれを着て、父の戦いを引き継ぎ、傷ついた様子で手を差し伸べられる資格を信じている。崇高な悲しみに没して、形と心の一体を信じている。

But I have that within which passeth show.

(1. 2. 85)

いや、この老人は、今度はそうは言わなかった。反対に、ハムレットの密かな行動は、彼が意図しなかった人々を巻き込んで、彼の「無視された愛」(3. 1. 187) に対する同情と心配を生み出す。誰の眼にも見えない、演じることもできない、心と心の応答のドラマが演じられていたのである。

亡霊の秘密を守るためハムレットは狂気を装ったが、その秘密の重大さとは彼の受けた絶望的な衝撃そのものだった。狂気の擬態で外に衝撃を隠しても、死の匂いには耐えられなかった。その顔をオフィーリアは地獄の亡霊の様だと形容する。すなわち、これは生きて動いて人を訪ねて来る人に適用される比喻である。地獄の恐怖とか亡霊とかの観念は、死者が死の彼岸からもたらした情報ではない。

with a look so piteous in purport  
As if he had been loosed out of hell  
To speak of horrors. (2. 1. 82-84)

オフィーリアにとって、この異様な変容を説明する唯一つの手掛かりは、王子の乱心の噂だった。本人は乱れた服に「愛」の説明を託して無言であったのであるが、無言によって不可解さが増幅され、「狂気」によって解釈された。

オフィーリアが用いた「亡霊」の観念と、ハムレットに現れた亡霊とは無関係である。しかし、ハムレットが宮廷社会から秘密を隠そうと企んだ「狂気」と、宮廷社会からハムレットが隠した「悲痛」とが再びオフィーリアの中で結びついて、「亡霊」のイメージを生むことになると、悲しみに応えて衝撃の受け手の中で作られるものとしての「亡霊」の性格が暗示される。それは生を生たらしめる生き甲斐の「不在」の苦痛のイメージなのである。

オフィーリアが王子の出現を乱暴な言い寄りと思わなかったのは、自分が危うく被りかけた不名誉な被害のことよりも、王子の狂気に心を痛めていたからである。誘惑者像が働かなかった点に、彼女の「同情」が潜んでいる。ホレイシオの制止を押し切った点に、亡霊へのハムレットの愛情が見えるのと同じである。

オフィーリアに描写された王子の無言の来訪は、「怯え」によって「狂気」らしく解釈されているが、直接見ていないポロウニアスはそれを動かない「狂気」の証拠として受け取ると同時に、度を失った娘が見落とした特徴を指摘する。娘の所に男が来るのは「恋」なのだ。(言うまでもないが、もしオフィーリアが「恋」に気付いていたならば、「狂気」とは思わなかったであろう。) こうして「狂気」が「愛」で説明された。同時に、娘が誘惑者像を消していたので、父は恋の被害者としての王子に同情する。娘に拒否を命じた理由が無くな

万歳」という兵士達の合い言葉の下にある、死に付された「人間」の共感、または共感に至ろうとする自然な動きを証明したのだ。誰も彼も、「身体」の利害に閉ざされながら「心」によって動いているのである。

ハムレットは、同情によって、復讐の義務に誘い込まれる。開いた心が、開いたために、それを閉ざす因子を迎え入れる。それが弱い身体で身体の弱さを越えようとする者につきまとう悲しみなのである。一幕五場の亡霊の言葉を分析する紙数は今は無いけれども、かいつまんで言えば、亡霊は、死で消失する「身体」の限界を越える「心」でありながら、身体を無くしているのに身体の権利に執着することによって、非本質的で不幸な幸福の幻想を託された父権や王権の努力の不毛さを浮き出させる。努力の不毛、それが亡霊の失意である。だが、亡霊は間違っている。彼の努力は終わっていない。無常の中で人は変わりながら、死者の生を引き継いでいる。また、なすべき唯一の仕事が不毛な努力であるような世界にあることがハムレットの失意であるとすれば、彼も間違っている。失意の感情こそ批評の母であり、救済の力なのだ。人間世界は共感と協力の網の目なのである。

#### 4

恐ろしい秘密を亡霊から聞いたハムレットは、秘密知られる危険を避けるために（恐ろしく愚劣なので「悲劇」の「喜劇性」に気が付かないと信じ兼ねるけれども）宮廷社会に対しては狂気を演じる。しかし、心を他人の目から覆ってみても、心の悲しみは耐え難いのである。

ハムレットは、死に等しい闇の中の孤独な身を、オフィーリアの美しい姿の前に現す。彼がここに現れ得る理由は、彼が彼女に求愛しているからである。亡霊が国王の姿で兵士達の前に立つように、ハムレットは「求愛する者」の懸命さによって受け入れて貰おうと、恋する者達には周知である「愛」の寓意を用いる。無慈悲な婦人に恋い焦がれて、絶望の極みに吐息に声を失い装いの頓着を忘れた「やるせない恋人」像を演じるのである。それは二人だけの秘密の世界を現出する魔力を持っている筈だった。だが、オフィーリアは只驚いて、出て行く王子を言葉もなく見送ると、父の所に報告に走ったのである。

この場と「尼寺の場」と、切迫した衝動によって、二つの文学的な恋の技が試みられて、どちらも失敗する。所詮それらの芸は宮廷風の恋の「戯れ」でしかなかった。そこまでは簡単に言える。どちらも結局、良識を出し抜こうとする狂った欲望の愚かな手管なのだと、ポロウニアスの口調を真似て、言うこともできる。

イシオが呼ぶ働きであるとしても、「心眼」は「姿」を媒介にしなければ「意味」に触れることはできない。死んだハムレット王が世界を訪れる時、兵士の前では生前の軍装姿を取る。ガートルードの部屋では部屋着である。認知して貰いたいのだ。だが、兵士達は疑い恐れて鉾を振るい、王妃には全く見えない。亡霊はその形から拒否と裏切りを感じるだろう。しかし、死んだ男に全幅の信頼を託し、従って彼が司った世界に全幅の信頼を寄せ、従って夫亡き後の世界を疑う何の理由もなく、世界を「友」と信じ続けて求められるままに身体を託し、無常の中で死者を愛し続ける女には、亡霊を見る理由が無いという真実を感じることもできるのである。母を慰めてやれと息子に命じる亡霊は、その思考の歪みを越えて、他者との交わりにおいて初めて自分の死に出会っているのだと、感じることもできる。無理に醜く解釈しなくても、弱さと悲しみを通して「人間」を美しく読み解くこともできる。

死者の言葉をこの世の人の言葉のように聞くのはハムレットだけである。第一独白は、独白という秘密の行為によって現実世界に生きている王子が、記憶の世界の目で父王を生前通りの栄光の中に安置しているのを示している。だから、一見すると、ハムレットは、父王像への忠誠によって、亡霊に走り寄るように見える。しかし、「姿」は同じでも光りは闇に変わっていた。想像の中に演劇的にあり得ても、現実にはあるべからざる死者だったのだ。死者の姿をホレイシオ達は禁じられたものとして、頑強に拒む。息子が恐ろしい「もの」に走り寄ったのは、帝王の姿をしていたからではない。「上品に」手招きする姿は、悪魔の技巧であり得た。

For they are actions that a man might play:

But I have that within which passeth show. (1. 2. 84-85)

彼のこの言葉が父以外の人々に対する洞察が欠けているのを示していても、彼が悲しみによって死者と繋がっているのは明白である。ハムレットを誘ったのは彼に見入る目の「悲しみ」の表情である。人は悲しみに誘われずにはられない。第一独白でハムレットは父に異常な結び付きをしめすけれども、亡霊に直面した時にこの異常な結び付きの虚構の部分がふり落とされ、弱さを共にする人と人との共感が愛情の根底であることが露われた。(やがて「寝室の場」で亡霊は妻の悲しみを前にして怒りと憎しみから解放されるであろう。)

悲しみに誘われて同情を発する時、王子は「父」の「姿」という「演技可能な」見掛けの向こうの、「人」に共感している。彼が依然「それ」を「ハムレット、王、父、デンマーク帝」(1. 4. 44-45)と呼び続けるとしても、彼は「国王

記憶の世界に止まることはできない。彼女もまた「死」に出会っている。しかし、ハムレットもその父も彼女の変化を「裏切り」と直感し、王子はそれを彼女の性欲で、亡霊は弟の誘惑力で説明する。

ハムレット王を死者の状況へと強引に連れ込んだ力は何か？ ハムレットに叔父を父と呼ぶように強いる力は何か？ ガートルードを夫の死後涙の乾く間もなく強引に再婚させる力は何か？ 死者も息子も、このように公平な目で、幸福だった三人に降って湧いた不可解な事件を眺めることができない。いや、眺めないから、ガートルードを「獣以下」だと解釈して、思い出に記録された愛情深く信頼篤い姿までも見失う。

「裏切り」の直感までにはいいのだ。その裏切りの事態がどのような経緯の結果であるかを他者の立場で考えようとしなければ、「裏切り」を言う者がそのまま裏切り者となっていることになる。すなわち、亡霊は、自分が妻の夫としての仕事を誰かに委ねなくてはならないことを無視している。ハムレット王が裏切られた時、その妻も裏切られた。そのことを彼女は知らないだけである。

「ゴンザゴ殺し」はその点を明かにすると共に、自分の死後の愛する者達の生活に心を配る余裕を与えなかった突然の殺人行為の残酷さを暗示している。しかし、その余裕が無いために、王の生前の生活意識の欠陥が明かになる。「果樹園」で「眠って」いたハムレット王は「命と、王冠と、王妃」を専ら自分の所有とみなして満足していたのであって、凍てついた闇夜に「国王万歳」と唱えて王宮を警護する人々の苦痛と不安を思いやることは無かった。実際、昔の衛兵達は前王の武勲のことを語り、亡霊を国家の危険を予知させる者として扱うが、亡霊が伝えようとしているのは、自分の死の苦痛と怒りだけなのである。

さて、王子に恋される喜びを知ったオフィーリアを、父と兄は求愛の「天上」から引き下ろした。国家の利害とそれを支える社会全員の義務という大義名分には、個人的な愛情や高貴さでは逆らえない。彼女は貞節で、忠誠で、従順な婦人として、父の家と王家と国家のために、それ全てを含んだ「良き国の希望のバラ」(3. 1. 161)である「王子」のために、ハムレットの愛を拒んでいる。それをハムレットは知らない。(第一独自の言葉の特徴は、自分の受けた衝撃によって遠慮なく世間を非難するけれども、自分に世間が何を求めているのか、人々がどのような衝撃に耐えて彼を支えているのか、洞察できない性格である。)王子の方で起こっている亡霊事件をオフィーリアは知らない。天上の時間からそれぞれ別々の経過で引き剥がされた二人であったから、互いに相手は以前の「姿」のまま記憶されている。

それは「姿」の「意味」を記憶していることなのだ。「行動」は「心」の繋がりを媒介する。しかし、媒介された「意味」を読み取るのが「心眼」とホレ

警告について何も知らなかった。同じ見解が同じ結果を生じる別の経路があったのである。

### 3

ハムレットがオフィーリアの部屋を訪れたのは、父の亡霊の訪れを受けた結果である。特に「地獄の恐怖を語りに来たような」という描写は、彼女が不可解なものに付けた苦し紛れのイメージであるとしても、ハムレットの悲惨な経験を想起させる間接の働きをする。父の亡霊の悲惨と苦痛と、栄光からの転落と、今や全くの暗黒と変わった世界で父が密かに命ずるままに暗黒の仕事を引き受けることの免れ難さとを、ハムレットは知った。「黄金の火をはめこんだ堂々たる屋根」(2. 2. 320) を戴く世界は、突然「けがらわしい瘴気の塊」(322) になった。孤独な亡霊が、信頼と愛情を注いで育てた息子の同情を求めに、死と生の境界を踏み越えたように、孤独なハムレットは道德のけじめを踏み越えて、美しく淑やかな「魂のアイドル」オフィーリアを求めた。

そこまでは、直感的に言える。しかし、この直感は、一人で冥界にあるらしい亡霊とエルシノアのハムレットとを同視して、亡霊とオフィーリアという互いに無関係な因子を無条件に結びつけてしまう。だから、この種の直感は「予言の力」であって、事態の默劇的な意味を把握する連想力を示すけれども、ハムレットが何を考え、何を狙ったのか、狙い通りになったのか、ならなかったのか、その間にどんな出来事が作用したのか、という具体的な経緯を跳び越えている。言い替えれば、直感の力に恵まれていても、現場の心理の動きについての解釈を間違えることもある。衝撃はそれ自体意味を持つ説得力であるけれども、衝撃を与える出来事の成り立ちの知識ではない。感情が役目を果たすためには分析力または洞察力を備えなければならない。

孤独に突き落とされた前王ハムレットの魂は、孤独に陥る以前の生活を、ひたすら恋しいものとして思い出す。そして、「命と、王冠と、王妃」の喜びに満ちていた記憶の中で就中愛している妻の姿を恋い求める。だから、「亡霊」は逆説なのである。亡霊は、生前の世界を呼び戻す不可能を知ってはいるが、彼が王妃の「墮落」に痛恨するのは、その変化を解釈するのに記憶の世界への帰属の義務を前提するからである。

死の岸から帰って、待っている筈の愛する姿の不在を発見する亡霊は、まさしくそこで「死」あるいは「無常」に出会っている。ここは死すべき者達の、その日その日を生き延びる「弱い者」達の、変転する世界なのだ。夫を失った王妃は、夫と息子にとって如何に大切な人間であったとしても、彼等の過去の



そのような礼節の世界で、オフィーリアの部屋を訪れるというハムレットの行動は、乱暴で不道德で危険であった。しかし、「尼寺の場」のオフィーリアと同じく、愛の必死さが、名誉の規範に隠れて名誉の規範を潜り抜ける一策を案じた。オフィーリアの策が失敗した理由を知るためには、ハムレットの企みが失敗した理由を同時に理解しなくてはならない。

オフィーリアを「怯え」(2. 1. 75) させたのは、王子の変わりようだった。「魂のアイドル」(2. 2. 108) に「天の神聖な誓い」(1. 3. 114) を重ねた「形の鋳型」(3. 1. 162) の姿は無かった。服装は乱れに乱れ、「憐れさを示す顔付き」(2. 1. 82) は「地獄から恐怖を伝えに来たよう」(83-84) であった。美しい、薫り高い言葉は失われていた。立っているのもやっとの様子であった。不可解だった。狂っていた。王子が去った時、オフィーリアは驚きを伝えに、父の所に走った。

部屋を訪ねて来た時の王子の様子を描写する部分と、彼の無言の行動を描写する部分との間に、ポロウニアスの言葉が挟まれている。恋に狂った、彼はそう直感した。その解釈の作用を受けながら、オフィーリアは王子の仕種を思い出す。「まるで私を絵に書こう (draw) とするように」(1. 3. 91) と記憶された姿は、自然と「引き寄せようとする」心を始め始める。「私の腕を一寸振った」(92) のも、無言で立ちすくんでいた彼女に余りの冷たさを感じて遠慮がちに揺り動かす意志を見せ始める。立ち去る姿は「さらば、さらば、忘れないでくれ」と必死に訴えながら、立ち去らねばならない者の悲痛を帯びて来る。この恐ろしい変化は、私が拒んだせいなのだ、それを私は気付きもしなかった。王子は愛の光りの無い闇に一人忘れ去られていたのだ。近頃のおかしな挙動の噂も道理だった。その惨めさを訴えに密かに訪れて来たというのに、私は判らなかったどころか、父に知らせてしまった。しかし、この恋は無理だと判っているのに、一体どうしたら良いというのだろうか？

記憶の中の無言の姿を描写しながら、無言劇の解釈を誤ったのに気付いた観客のように、オフィーリアは王子の現状を余りにも知らなかったと悔いる。その心の底に働いているのは、王子への尊敬と思慕であり、それに由来する同情である。「類い稀な高貴」の記憶が不動でなければ、「狂気」に、彼女を「駄目にする」(2. 1. 113) 意図を見つけることもできた。王子の誓いの蜜の味が今も記憶の宝箱に鍵を掛けて蔵い込まれているのでなければ、愚かしい恋狂いを自分のこと以上に憐れむ結果にはならなかったことであろう。

「尼寺の場」でこの同情が、同じく蔵い込まれた「番人」の目を如何にくらまそうとしたか、すでに前節でざっと見た。やがて私たちは、それをハムレットが「番人」の目で非難するのを見ることになる。だが、勿論彼は恋人の兄の

れていた。少女をめぐる見えない争いが展開していた。恐れて退いていれば良かったのだ。しかし、王妃の願いに応じて、オフィーリアは動いた。それは、父の過ちを償い、王の心配に手を貸すことでもあった。彼女は「愛情の後尾に」(1. 3. 34) いながら、人々に協力することが自分の「切望」(32) でもあるのを知った。心深く、気高い誓いが彼女を誘っていた。

「名誉」の厳しい要求に強いられて、淑女オフィーリアは、父に向けて「名誉」を演じる。それは、物質的に清潔な精神であるが、相手の愛が消えれば憤慨するだけの、自発的な愛をもたない平板な貴婦人像で、抗議と拒否の身振りにおいて「高貴な」特徴を発揮する。

だからこそ、オフィーリアの自発的な行動の意味が解る。貞節像を演じながら、彼女は憐れみと献身を知っている。「醜聞の打撃」(1. 3. 38) の「恐れ」(33) を跳び越えて、「貞節な宝を開いて」(31) いた。それでも「名誉」が支配していた。「身体」は二重の意味を持たされた。互いに拒絶し合う二重の意味であった。

秘密の恋の手管の思い付きは、ひとり部屋で読んだ恋の手ほどきからのひらめきだったろう。それはやはり禁断の領域であったが、最早「桜草の咲く恋の戯れの小径」ではなかった。みずから「裏切り」の証人となって、オフィーリアは、力が支配する世界で隠れた愛の幻想が空しく「言葉」に立て籠もった歴史の縮図となった。「言葉」を「身体」に変えた時、王子のために、いや彼女に密かに協力を求める全ての人々のために、売春婦の聖なる役を選んでいたのである。それが「哀れにも心破れた」(3. 1. 164)「宮廷婦人」(164) の真実の姿だった。第一独白で判ることであるが、彼女達には自分の意志で求愛することが許されていないのである。

## 2

「尼寺の場」でハムレットは憤激し絶望する。彼の「見た」ものを見るには、彼がオフィーリアの部屋を訪れた場に戻る必要がある。それは、中間にポロウニアスの言葉が挟まれたオフィーリアの報告によって伝えられる。

王子は接近を拒まれているが、裏切られたのではない。父が娘に与えた訓戒を知る由もないから、「私的」で「天上的」な求愛の次元のままで、「つれない美女」を慕う「やるせない恋人」になったのである。彼は彼女の拒絶を「氷のように貞節で、雪のように清浄な」(3. 1. 142-143) 美德と解釈する。実際にはこの美德は、一方では官能のささめきを潜めた慎重な恥じらいであり、他方では無感動な拒絶を命じる父権の働きである。

考えていた。娘の意向を聞かなかっただけではなく、知らずに大変な重荷を負わせたのである。

無責任な誘惑と諭されて王子を拒んだ挙げ句、今それがハムレット錯乱の原因と聞いて、ことの意外に驚くオフィーリアの溢れるような憐れみの気持ちからすれば、恋に苦しむハムレットは此の間ずっと打ち捨てられて来たのである。あの「高貴な」姿を捨てたのは自分なのだ。国家の大切な王子、王妃の大切な王子を元の姿に戻せるのは自分だけなのだ。誓いを嬉しく聞いたきりで断念した彼の愛を受け入れれば、またあの「天」が戻って来るだろう。王子は「以前のよう」に「気高い精神」(3. 1. 159)の美しい「言葉」を取り戻すだろう。

だが、オフィーリア自身は兄と父の「良い教え」(1. 3. 45)より以前には戻れない。王子の誓いの蜜を吸っていた昔に戻るには、王子と自分の立場を知り過ぎた。彼女の「鍵をかけた記憶」(1. 3. 85)の中では、「番人」(46)が「恐れよ」とたしなめる。その「恐れ」に正確に呼応して、父が立ち聞きしているのである。何処を見ても「名誉」が立ちはだかっている。しかし、彼女から王子に言葉を掛ける機会は今を措いて無いだろう。王子を癒す機会はもうないだろう。

立ち聞く者達は、王子の昨今の奇妙な挙動が恋の錯乱によるかどうか確かめればよかった。男達の動機に対しては、オフィーリアは黙って、所有者の意に応じて展示され買い手の必要に応じて値踏みされる品物のように、座っていればよかった。しかし、女達の動機は彼女に王子の誘いに応えて、彼を錯乱から誘い返すことを求めた。しかし、娘が恋の「交渉に自分で乗り出す」(1. 3. 123)などもっての他だと父親は嚴重に言い渡していた。

祈るオフィーリアに、「祈りの書」が靈感を与える。王子の愛の「誓い」に「応えて」、愛の「祈り」を返すのだ。愛に満ち敬神の心篤い王子は、「祈りの書」が彼女の愛の祈りの寓意であることに直ぐ気がつくだろう。「思い出」を「返す」ことの意味を理解するだろう。

祈りの本が王子からの贈り物ではないことが、寓意を解説する鍵だった。立ち聞きしている者達は、彼女が例の祈禱書を差し出しているとは思わないで、何か贈り物を返していると信じるだろう。彼等は、どんな品物よりも愛を大事にする淑女、相手の愛が「消え」たら愛の形見を「返す」誇り高い貴婦人を想像するだろう。父は満足するだろう。

オフィーリアの負った困難はエルシノア世界の隠れた矛盾の縮図である。ハムレットがオフィーリアに伝えた愛の心も、ポロウニアスが娘に与えた命令も、この世界で生きて行くための協力の要請なのである。しかし、ハムレット王子の恋は娘の父を無視していた。そして大臣ポロウニアスは王族の気儘さを恐

の証拠の品の装身具は一体何時何処で貰ったのであろうか？ ハムレットには覚えがあるのであろうか？

いや、愛の贈り物を交わす間柄ではなかったし、装身具など絶対に考えられない間柄であったのである。ハムレットの求愛は社会的に認可され難い「私的」(1. 3. 92)なものだったが、社会生活の「身体」性から離れて、「天上的」(2. 2. 108)な次元に「言葉」の情熱の場を見出していた。これがハムレットの美しさである。その「類い稀な高貴さ」(3. 1. 166)を証言できるのはオフィーリアなのである。

「尼寺の場」で大切な小道具は、ポロウニウスが娘に持たせる「祈りの書」である。それは、人物達の胸に起こす連想によって、それぞれの意識の位相を映す。娘に祈る様子をさせながら、ポロウニウスは、悪魔を敬神の姿で飾ることもできると言う。それを聞いたクロウディアスは、売春婦の白粉よろしく言葉の彩りで醜い秘密を隠すことの苦しさを独白する。

ポロウニウスは、うしろめたさを感じていながら、国政の助言をしている善人の自分を信じて、王のために行動している。クロウディアスは、苛責を感じながら、忠誠な大臣との協力関係を信じている。互いに、自己批判の力を覆い隠し合っている。ポロウニウスは気付いていないが、善良な自己像は「習慣という悪魔」を隠す。「間接法」(2. 1. 65)は、企みの知恵を信じる余り、娘の「心」を確かめることさえ怠って、父は「売春宿」の主人となる。また、クロウディアスは気付いていないが、彼の場合、売春婦の白粉とは王権の威力である。両者の良心は疑いを容れないが、良識の無条件の拠り所である社会的習慣に、自己満足という悪魔が巣食っていて、反省や犯罪を隠し込み、「身体」の誤用を認可する。彼等自身の「身体」こそ、哀れにも自分を権威の欲望に供して生きている「売春婦」である。

さて、ポロウニウスは娘に祈りの演技を求めたが、オフィーリアには心から祈る理由があった。あの美しく気高い言葉の持ち主である貴公子ハムレットが、こともあろうに彼女の部屋に乱れた服装で亡霊のように現れ、ただ黙って溜め息をついて出て行ったのだ。父はそれを彼女に拒まれたための錯乱だと説明したのである。そして王妃ガートルードは、彼女の力で王子を以前の姿に戻して欲しいと言った。

王妃は、結婚を考えてそう言った。

I hop'd thou shouldst have been my Hamlet's wife.

(5. 1. 266)

王妃は善良であったが、結果的には気儘に「私のハムレット」のことだけを

「宮廷人の鑑」ハムレットが神々にかけて「淑女」オフィーリアに高貴な恋を語った。さて、求愛は当然変化への誘いであるが、この恋愛はどこまで進展しているだろうか？ 王子の言葉が誘いであることは両者にとって自明である。では、オフィーリアの態度はどのように解すべきか？

彼女は王子の「音楽のような誓いの蜜を吸った」(3. 1. 165)と証言している。「香しい息」(98)と「その薫り」(99)を想起する息遣いは接吻のように官能的であるが、耳から入った「言葉」の効果なのである。彼女にしても、嬉しく聞き惚れることが憎からぬ気持ちを表わすとは理解しているだろう。でも、それが恋を受け入れることだと考えているであろうか？ 彼女自身の言葉を使えば、「いけないお坊様のように」(1. 3. 47)「桜草咲く恋の戯れの小道」(50)にすでに踏み込んでいるであろうか？

危険な誘惑の場に登場して「とてもおおらかに惜しみなく耳を貸して差し上げた」(1. 3. 93)と伝えられる娘は、「心」では父が思う以上に深く誘われながら、「身体」では父が思う以上に慎重なのである。

また、口説くハムレットに取って、聞いているオフィーリアの姿勢は承諾を意味し得るであろうか？ 彼は、接近を拒まれた後でも、「軽んじられた恋の苦しみ」(3. 1. 72)を、耐える他ない嘆きに数えている。報いられない恋に対しては、絶望に迫られながら懇願する以外にない。「言葉」は「心」を直接動かしていても、「身体」を動かしてはいない。女の心がどのように動いたか、男には判らない。

ハムレットとオフィーリアの関係はこのように未完の、疑わしい、いわば慎重深い段階で差し止められた。これがこの恋の宿命であった。王子の父王の亡霊にも、少女の父の大臣にも、この恋を祝福する余裕は無かった。

ところで、一度生まれた誤解は、その誤解を解く材料になる筈の事柄をさえ、誤解で塗り潰してしまう。「尼寺の場」でオフィーリアが胸から装身具の類いを取り出して差し出すことになった時、恋人達の行き違いを理解する唯一の手掛かりが無くなった。彼女が返そうと差し出すからには、それは貰ったものなのだ。「何も上げた覚えは無い」とハムレットが言っても、それは嘘に違いない。すでに愛の形見を受け取る間柄であった女の裏切りを皮肉っているのだ。その証拠に、「お前はそれで正直者なのか？」(3. 1. 103)と続けて裏切りを非難しているではないか。

この伝統的な確信には、伝統という権威がある。それに晒されてはオフィーリアは分が悪い。泣いても悩んでも、裏切ってしまった後なのだ。しかし、そ

きを消去して、死へと突き動かされる身体の動きだけを残し、苦痛を感じる心がそれを無力な観客のように眺めたものなのである。そして、この厭わしいが逃れられない宿命の感覚は、人物にとって一方で死に至る自分の名誉の義務でありながら、他方何時もその裏に、心の願いを裏切る他者の身体の不貞性、その裏切りの免れ難さの予感を従えている。不幸な循環、同語反復なのだ。一つの異常適応の状態が再生産されて行く。

しかし、もし人が、懸念というものは懸念通りの解釈を生むものであることに用心できれば、当惑が生じたときに、相手の行動の中に自分の不幸な読みに合わない所があるのに気が付くかも知れない。私達に求められるのは、人物による読みを介して、彼の錯覚に気付く、宿命の構造を辿り返すことなのである。すなわち、心の支配を離れ身体の苦痛と同義になった宿命を、心と身体を備えた人間の手のものとして取り戻すことなのである。

世界がある感情に対応するように「見える」ならば、感情のままに行動する他ないように「見える」だろう。行動が引き起こす結果は感情の価値に客観的に対応するものと見える。つまり、感情はその強度によって合法化され、その反応形式は規範となる。それはそれで一つの「見え方」であり、それが狂気の観を呈しても避けて生きるわけには行かないと信じられるだろう。事実、人はそのように歴史を語ることも、政治をすることもできる。しかし、そこで余りに心に染まない事が起こるならば、心を置き去りにして物語りを進め過ぎたのかも知れないのである。

ハムレットの独白が私達に聞こえなくても、彼はあの通りに行動するのである。すなわち、彼は誰からも心を隠して、命じられた行動を義務として受け入れる。しかし、彼が独白するのは面白くないからである。事件の経過が心に染まないからである。彼の中で、健全な批評の力を破壊的な方向に歪ませる何かが、神聖な名を帯びて働いている。それに気が付くことができるのは身体の動きと心の声とを偶々両方知っている「観客」、あるいは「私を見る私」である。全てが「芝居」だと知るとは、空だ、無意味だとさとりすることではなく、ものの始めの実体と意味に触れることである。

それぞれの心に状況の特徴を印加されて、世界に裏切られた人物の孤独な当惑は一定のパターンを反復し、全体として連鎖状をなし、一対の人間関係においてはシムメトリーをなしている。本稿は、このような行き違いのパターンを例証しようとするものである。

「彼岸」において処理されることになっている。そして、神の権威は王権像と密着していて、ここに円環が閉じる。集団を支配しているのは、この循環であり、「名誉」が生み出す苦痛は各人の手を離れて、宿命化している。個人的には死が全てに終止符を打つが、「彼岸」に託されたもの、すなわち、死によって隠し込まれたもの、を伝えに来るのが亡霊である。だから亡霊はこの世界の負う私的な、つぐわれぬ苦痛の姿であり、最早生への期待によって緩和され得ない彼の無念の言葉は、人物一人々々が隠し持つ苦痛の成り立ちを典型的に明かにしている。

宿命は、心にわだかまっていた懸念が、心配した通り実現するという形で経験される。ハムレットについて例を挙げて見よう。ガートルードの再婚はハムレットを驚かすが、「女は不貞だ」という一般論がこのときのために用意されている。この一般論は強い感情を伴っていて、近親相姦に至るまでの非難を合法化するが、反対に、現実の中に一般論を修正するような因子を発見するということは起こらない。記憶に残る母の愛さえ偽りの見せ掛けと見なされてしまう。また、父の亡霊が出たと聞くと、ハムレットは隠された殺人が神秘的に暴露されるという観念に跳び移るが、これは「殺人－亡霊－復讐」の演劇的連関が彼の心に畳み込まれているのを示す。ハムレットは自分の「予言の力」(1. 5. 40) に驚くが、彼の心の習性は、叔父が父を殺したという事件とは直接関係は無い。歪んだ状況が想像力に偏りを与えたことが、歪んだ欲望で傍証されているに過ぎない。その普遍的な歪みは、神のような父と獣のような叔父を対比するハムレットの感覚にも反映していて、王権の栄光の私的な性格を示し、クロウディアスの私的な殺意が醸成された状況を自ずから明かしている。三者ともに一定の状況に属した思考と行動の様式を共有しているのである。三者ともに同じ宿命に追われている。

人物の目からは、世界が彼の希望を裏切って、懸念した通りに動いていると見える。彼は、懸念こそが正しい予想であったことをあらためて覚る。仕方なく彼は懸念された被害に対応する防衛行動に出る。その行動が相手から見るとやはり懸念通りなので、彼もまた同じ原則にしたがって行動する。苦痛と復讐の対応からなる共通の行動原則が、互いの誤解に基づく不適切な行動によって作り出されて正当化されて行く。これが「習慣という怪物」の構造であるが、すべての動力は苦痛を感じ変化を求める各人の動きなのである。人物それぞれは、心にもなく、不幸な予想通りに動く世界に耐えなくてはならない。

すなわち、悲劇的宿命とは、以上の過程から事態の改善を求めて惑う心の動

等はそれぞれ自分を正気と信じているのであるから、彼等の判断をもとにする限り、裏切りと狂気の世界は同時に正直で正気の世界だということになる。自分から見ると自分は正気で、相手から狂気と見られているなどとは夢にも思わないというのが、共通の「事実」なのである。つまり、ここでは、人と人との間で道德上の定義が逆転して、言葉が役に立たない。それが「狂気」の具体的内容である。狂気と言え言える状況は、この狂気に晒された群像の動きである。誰も特に狂ってはいないのであるが、皆が言葉を信用していて、知らぬ間に意味を変えてしまう言葉に翻弄されているのである。

ハムレットの求愛からこの場に至るまでの間に、両者は、相手には打ち明けられない話しをそれぞれの父親から聞いており、人間関係について重大な認識の変化を来している。オフィーリアの側では嬉しい求愛が危険な誘惑となり、ハムレットの側では禁じられた反抗が遂行すべき義務となっている。社会関係のそこそこに正反対の解釈が用意されており、態度の逆転を命じる。

父親達が「名誉」を守るために子供に求める忠誠は、デンマーク秩序の部分々々をなす筈のものでありながら、秘密のうちに、猜疑心と復讐心を露わにして命じられ相続される。子供達には、父達からの情報を互いに確認する自由がない。ハムレットがオフィーリアに不倫を見つけ、彼女が彼を狂気だと信じるのは、両方で解釈の逆転の作用を受けて、互いに相手の懸念通りと思わせる行動を取るからである。恋人達の行き違いは、秩序の内部に隠されている対立、家族単位の父権によって秘密のうちに合法化されている対立を映すのである。

ここで明らかになっているのは、エルシノア社会の協力体制が、密かに不安と怒りを醸成し、隠れた対応行動を引き起すということである。ハムレットもポロウニアスも批判的意見を隠す。忠誠の姿勢と権利意識との間に習慣的な隙間があって、私的な心労を生んでいる。各人は忠誠の義務を遂行する中でこの隙間を埋めて行くのであるが、それは公に掲げられた忠誠が私的な隠れた禁欲に支えられることであるので、貞節は、本来的に不貞の疑いに晒されている。人は、義務と欲求の背反、共感と誘惑の区別し難さに苦しむ。

人物達の意識を離れて言えば、この状況を前提にしている限り、貞節も不倫も等しく同じ自己瞞着を演じている。権威の要求にもとれば「狂気」と呼ばれるものは、権威の好意を受ければ「血気」と呼ばれ、権威と合体すれば「名誉」と呼ばれる。公の強権は、私的な相においては、欲望の狂気の装いなのである。神格化された王権像を盾にした「名誉」という名の権利意識は、同じく「名誉」という名の私的な復讐心を伴っている。その孤立した自己主張の姿勢も「名誉」である。孤立と殺意は挫折感と罪障感を生むが、これは神の権威で



The observ'd of all observers, quite, quite down!

(3. 1. 160-163)<sup>2)</sup>

という変化に対して、

O! woe is me,

To have seen what I have seen, see what I see! (169-170)

という無力な失意を表白するが、これは純真だとばかり信じていたオフィーリアが実は不貞な女だったのを発見したハムレットの

This was sometime a paradox, but now time gives it proof.

(115-116)

という変化の認識と

It hath made me mad.

(155)

という絶望に対応する。彼等それぞれは健全さと狂気とを区別しているつもりであるから、互いに相手が狂っていると考える。

面白いことに、ハムレットが相手のことを不貞呼ばわりすれば、私達にもオフィーリアは不貞と呼ばれてもいいように見えるし、彼女が王子を狂気だと言えば、王子の感情と表現には狂気と呼んでもいいところがある。それで、私達は、ハムレットとオフィーリアがそのことを言っているのだと思い、だから人物と私達とが共通に認めたものが客観的な「事実」であると考え。すなわち、ハムレットの激しい呪いの感情はオフィーリアの漠然とした裏切りに対応するものと認められ、ハムレットの感情が根拠を得るとともに、オフィーリアの態度に彼の感情に見合う意味が読み込まれる。同じことが、王子の狂気に対するオフィーリアの感情についても起きるが、結局感情の強度が事実とその意味を決定する世界では、彼女の言葉はハムレットのそれに圧倒される。

ところが、オフィーリアとハムレットを不貞および狂気とみなせばみなせるという私達の状況判断は、それ自体は正しくても、二人の人物がそれぞれ見ているものとも、下している判断とも無関係なのだ。この二人は互いに勝手な独断的な解釈を下し合っているのであって、悲しくてもそう解釈するほかない明白な「事実」を前にしていると信じているのである。彼等の意識は互いに行き違っているが、私達の判断も彼等の意識とは行き違っている。

自分では理性的だと信じている二人のありようを鳥瞰すると、全体的な状況が彼等自身が言う通り裏切りや狂気に似ているのである。しかし反対に、彼

れの解釈の思想や批評の技法や観想の美意識を面白いと思わないからではなくて、解釈や批評の努力が注がれた「ハムレット」という対象自体が一定の習慣的な枠内の解釈の産物だったのではないかと考えるからである。

私見によれば、この芝居、あるいはその「言葉」は、丹念を極めた論理と寓意の一貫した組織であり、一見して全体の構成が「見える」ようには作られていない。見えなくても、人と世界の動きの全体像は掴める。その全体像を作品の筋書きとして認め、その筋書きと個々の人物の言葉との間の奇妙な不釣り合いに気を取られて来たのが、従来の「ハムレット」観賞の態度だったのではないであろうか？

前王の亡霊が秘密を持ち、その弟の王が秘密を持ち、王子が秘密を持ち、オフィーリアも秘密を持たされ、いや全員がそれぞれ隠し事の辛さに呻くこの世界は、アクションのレベルからは隠された秘密をもっている。行為の連鎖として筋書きを把握し、主人公の死に至って結果論的にそれを形式付け意味付けて承認するという意識からは、常時一貫して擦り抜けてしまうものがある。

「行為」に対して「心」と呼んでおくその世界は、結果ではなく目的の、反応ではなく動機の、始めにあったものの世界である。それはいつも「心眼」の前に有るのであるが、その秘密そのものである人物達自身には意識されない。

「独白」は二つの世界のいわば接点であるが、結果論的な思考の隙間から不穏な悶えが噴出するだけである。しかし、彼等の「言葉」の外被である「思想」の裏に隠れた「心」を覗く角度さえ見つければ、思想が要求し達成する完結した物語り構造の裏に、「人間」が要求し達成しようとする未完の「夢」が全てを浸して流れているのを見ることができる。実体と見えたものが“seem”となり、“that within which passeth show”が現れて来る。

そうすると、じつに面白いことであるが、これまで「ハムレット」について語られて来た言葉がどれほど人間にとって大切な価値を持っていたのか、それは何処から由来するのか、というようなことが、殆ど表現し尽くされて眼前にあることに気が付くのである。そのような観点から、様々の場面や様々な人物が相互に説明し合う精密な内部構造を分析するのが先ず当面の仕事だと思うのである。

ハムレットはオフィーリアを激しく非難するけれども、実は彼女も同じく理性も感情もある人物として同じ社会秩序に属している。ただ、その秩序には人物達の間隔を作り出す性格がある。当事者はそれを知らずに法を守っているので、隔たりを感じると、孤独な当惑と悲しみを経験する。

たとえば「尼寺の場」のオフィーリアは、

# 「思 い 出」 と 「祈 り」

—再び「尼寺の場」をめぐる—

丸 田 敬

## 前 言

「ハムレット」の所謂「尼寺の場」で、ハムレットとオフィーリアとの間に行き違いが起こる。この場に先立つ二人二様の経験に影響されて、互いに恋しながら、不幸な誤解をすることになる。

そのようなことを何年も前に一文に書いたり。それはこの場についての、いやこの作品についての従来の了解から余りにも違っていた。理解して貰えなかった。今、私は何故そうだったのか、そうでなくてはならなかったのか、すこし言えそうな気がする。言っておかなくてはならないという気がする。

最初から、ことは「尼寺の場」の新解釈の問題ではなかった。それが成り立てば、作品全体の展望が変わるのであった。そして、その奥行きをこわごわ覗いただけでも、その解釈を捨てるわけには行かないと思われるのであった。おぼろげに見えていたのは「ハムレット」一篇の主題と構造の根幹であり、シェイクスピア劇の基本的な発想と技法の問題であった。14年前に「尼寺の場」を取り上げたのは、その展望を見出す切っ掛けになったのがその場だったからであるが、他の幾つかの重要な場も同じ方法で分析できることも、どの場も主題と技法の好例として挙げ得ることも、ほぼ確かめていたのである。それでもやはり、こわごわ覗いただけだったのだと今は言わなくてはならないだろう。今見ると思い違いも強調の置き違いも多々あるけれども、何よりも立ち塞がる壁の意味に気付いていなかったと言えるだろう。

「ハムレット」解釈の歴史の魅力は、この作品の特異な謎めいた性格に由来する華やかな多様さにあるけれども、その甲論乙駁の多様な解釈が「ハムレット」の魅力となり得るのは、「ハムレット」の筋書きを構成する具体的因子、つまり「事実」、について一定の了解が成立しているからであると思われる。私が以下の論考において先人の業績にできるだけ触れないでおくのは、それぞ